

「摩文仁の丘に」

沖縄県立首里高等学校三年 金城 愛那

今 摩文仁の丘に

草の香りがたちこめて
そつと一時風が止む
蟬はますます鳴きたてて
真上に照りつく太陽が
絶えず水面を撫でていく

あなたはゆっくり立ち上がり
再び香る潮風に

あなたの白い髪の毛を
じつと好きにさせている
黒い衣服は熱を持ち
次から次へと湧く汗が
あなたのかめかみを
筋となって流れ落ちる
隣に寄りそう私はただひたすらに
あなたの瞳を捉えようとしていた
茶色澄んだその目には
眼下の海が確かに映る

青い青いこの海にあなたは何を見るのだろう

今では大きな皺をいくつも刻むその手が
七十四年前のあの日、
まだ幼く 誰かのぬくもりに包まれていた
あの日、
戦は海からやってきた
戦艦が 戦闘機が
轟音と共に島を蹂躪する
あなたが遊んだ草原が
あなたが通った学び舎が
炎に、包まれる

—— 灼熱の日々
あなたは走った
何でも食べた
息を殺した
唇を噛んで。
かつて優しく手を包んだ人は
もう動かなかった
一滴の涙も流せず生きた

青い青いこの海にあなたは何を見たのだろう

眼下の海は穏やかで
消えた傍から追いかける
波にひかりがあふれている
ぽつりとぽつりと吐きだした
あなたの声は湿っていて
何度も何度も震えが混じった
そつと重ねられた手。
その熱さにはつとする
力強い、あなたの五指

「繰り返すなよ」
あなたは真っ直ぐ私に言った
あなたの瞳に戦火があった
どんなに時が経っても消えない熱
語り尽せない、灼熱

青い青いこの海にあなたは何を見たのだろう

止まらない波の音
私はあなたの言葉に耳を傾け続ける
隣で熱い手を握り返しながら
瞳の奥の戦火を覗く
そのなかに漂う幼いあなたを
思い続ける
あなたの日々を
考え続ける。

もう二度と、あなたにあの日々を見せはしない

青い青い眼下の海
—— 美しい島。
燃える陽の下で
波が生まれ
命が鳴り響く
「繰り返しません」
私もあなたに真っ直ぐ返す
瞳に、私が映っている